

亡き人との出会い



お葬式がつい先だって町の公会堂（地区公民館）がありました。

まだ若い五十年代のおかあさんのお葬式でした。残された子供はまだ高校生・中学生でしたので、お通夜・告別式とお参りさせていたので、お通夜・告別式とお参りさせていた。だいていても、胸つまる思いで、亡くなつた方のお心を偲び、また母を送る子供たちの悲しさにも思いを寄せて、沈痛な悲哀を味わいました。

その日から半月たつた今、わたし、実は、とても醒めたきもちで、「人の死」というものにつくづく思いをいたしております。今までになかつたことです。

と言うのも、私が小学校にあがらない子供の時分に、父にも母にも別れました。幼児のことですから、父母が死んで、親子が別れるということはどうなんことなのか、全く分かりませんでした。

「お墓にお参りしなさい。寺に参りなさい。念佛唱えなさい。さうしたらどんなに遠い昔死んだ人とも出会えるのです」。誰からとなくそんなことを教えられ、それで私、成人してからも、年忌や命日には一応はじめて法事をつとめお墓にも参ってきました。

ところが最近になつて、例の「千の風になって」という歌がはやります。「お墓のままで泣かないでください。わたしはそこになんかいません。……」確かに、昔々に死んだ父母は、そんなにいつまでも墓の下にいるはずはありません。お仏壇にもいません。赤茶けた写真を見てもそれが実の父母だとは実感できないほどです。私の記憶力からは完全に消えてしまっています。亡き人を慕う子供の心は、実際ははないものです。別れた当初は、惜別の情もあります。亡き人を慕う子供の心は、実際ははかりませんが、年の経過とともにそのこころも消えていきます。

九月一十一二日 午後2時より
彼岸会法要

孔子さまの人生訓。一言で言うと「恕」。
「思ひやり」。
いやだと思うことを、わざと人にしかけることはありませんか。あなた。

仕事は探してでもせよ

猿も木から落ちる
上手の手から水がもれる
弘法にも筆のあやまり
自信はつまづき

失敗は成功のもと
ことわざ
なぜうまくいかなかつたのかな
どこが間違つていたのかな
反省し原因追及してみよう
それが成功のもと

夕焼けこやけの残照も山のお寺の鐘の音も、

浄土からの呼び声です。

お淨土からの声と鐘の響きのなかで

カラスも人も、大人もこどももいっしょに

帰る世界をお彼岸のこの日にもたらと思

います。